

鹿児島県総合教育センター

令和3年度長期研修研究報告書

研 究 主 題

自己理解を深め、課題に気づき解決する生徒の育成
－知的障害特別支援学級における自立活動の実践を通して－

さつま町立宮之城中学校

教 諭 北 山 遥

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の構想	
1	研究のねらい	1
2	研究の仮説	1
3	研究の計画	2
III	研究の実際	
1	研究主題に関する基本的な考え方	
(1)	「自己理解を深め、課題に気付き解決する」とは	2
(2)	知的障害のある子供の自己理解の特性	2
(3)	知的障害のある子供の自己理解の支援と指導	2
(4)	自立活動について	3
2	実態調査及び考察	
(1)	実態把握の方法	4
(2)	実態調査の概要	4
(3)	本校の実態	5
(4)	考察	5
3	生徒の自己理解を図るための自立活動を中心とした授業づくり	
(1)	授業づくりのイメージ	6
(2)	自立活動の活動設定における工夫	6
(3)	自立活動の学習過程における目指す生徒の姿と具体的な手立て	6
4	学校生活における自己の振り返りの在り方	
(1)	知的障害のある児童生徒の学習上の特性について	7
(2)	学校生活における自己の振り返り	7
5	検証授業Ⅰの実際	
(1)	検証授業Ⅰの視点	8
(2)	対象生徒の実態	8
(3)	授業づくりの実際	10
(4)	授業の実際	10
(5)	検証授業Ⅰの成果と課題	13
(6)	検証授業Ⅱへ向けて	14
6	検証授業Ⅱの実際	
(1)	検証授業Ⅱの視点	14
(2)	授業づくりの実際	14
(3)	授業の実際	15
(4)	検証授業Ⅱの成果と課題	20
7	生徒の変容と考察	20
IV	研究のまとめ	
1	研究の成果	23
2	今後の方向性	23
※引用文献, 参考文献		

I 研究主題設定の理由

共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築においては、障害のある者となない者と同じ場で学ぶことを追求するとともに、自立と社会参加を見据え、多様で柔軟な仕組みを整備することが重要とされている。また、障害のある児童生徒が自立し、社会参加するには、各教科等で学ぶ知識や技能等の他に、障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する力を身に付ける必要があるとされている（文部科学省¹⁾，2019）。そして、インクルーシブな社会で、障害のある子供が生きていくためには、自分一人ですること、他人の支援を得てできることが分かるといった自己理解が重要（片岡・小島²⁾，2017）であると考えられている。しかし、障害のある子供は、その特性から自己理解の発達につまずきが生じるため、自己理解を深めていくことには支援が必要である（小島³⁾，2015）。そこで、障害のある子供の自立と社会参加には、多様な学びの場における自立活動の指導を中心に、学習上又は生活上の困難な状況を認識し、自分のよいところも悪いところも含めて自分であるといった自己理解を深めていくことが必要であると考えられる。

ところで、本校では、特別支援学級の在籍生徒の増加や生徒の障害の種類や状態等の多様化から、特別支援教育の充実が学校教育目標達成のための重点課題となっている。しかし、現状として、教師は、個々の実態に応じた指導の工夫、特に自立活動における活動設定に悩んでいる。また、教師が生徒の課題として捉えていることを、生徒自身が課題として受け止めていない姿がある。これらの要因は、障害特性により生徒は自己理解を深めていくことが難しく、授業や学校生活において客観的に自分を十分に見ることができないため、自分のよさや改善しなければならないことなど、具体的な自己理解ができていないことだと考えられる。そして、教師が自立活動において生徒一人一人の実態に応じた授業づくりがうまくいっていないことや、教師間で生徒に関する情報共有が不十分で生徒の実態に応じた指導ができていないこともその背景にあると考えられる。

以上のことから、本校の特別支援学級において、生徒が自分を客観的に見て、具体的に自己理解を深めていくためには、教師が知的障害のある子供の自己理解の特性を踏まえ、生徒の実態に応じた活動設定を自立活動において行い、授業づくりをしていくことが必要であると考えられる。そこで、生徒の自己理解を図るための自立活動を中心とした授業づくりや、生徒の自己の振り返りの在り方を明らかにし、生徒が自分を客観的に見ることができるようになることが大切であると考え、本研究主題を設定した。

II 研究の構想

1 研究のねらい

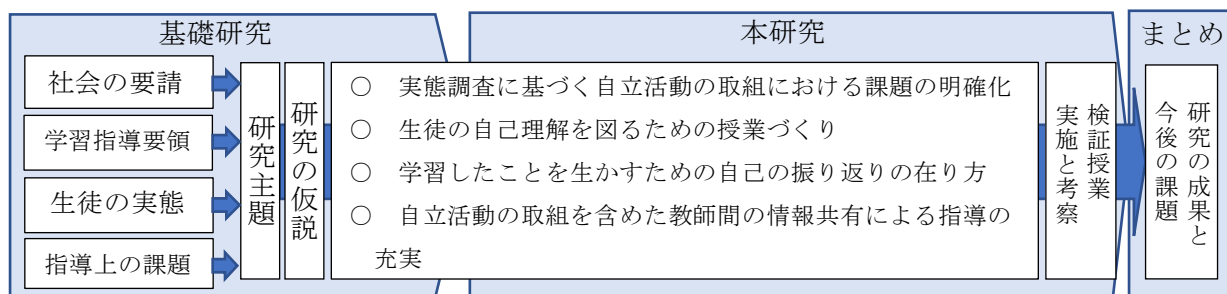
- (1) 教師・生徒に対し実態調査を行い、自立活動の取組における課題を明確にする。
- (2) 生徒が自己理解するための自立活動を中心とした授業づくりを考える。
- (3) 生徒が学習したことを生かすための学校生活における自己の振り返りの在り方を考える。
- (4) 特別支援学級担任と交流学級担任が連携して、自立活動の取組を含めた情報共有を行い、生徒の自立と社会参加につながる指導の充実を図る。

2 研究の仮説

生徒の自己理解を図るための自立活動を中心とした授業づくりや、学校生活における自己の振り返りの在り方を明らかにし、生徒が自分を客観的に見ることができるようになれば、自己理解を深め、課題に気づき解決する生徒の育成につながるのではないかと考えられる。

-
- 1) 文部科学省（2019）『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）』（3版）開隆堂出版株式会社
 - 2) 片岡美華・小島道生編（2017）『事例で学ぶ発達障害者のセルフアドボカシー「合理的配慮」の時代をたくましく生きるための理論と実践』金子書房
 - 3) 小島道生（2015）『発達障害・知的障害のある子のゆたかな自己理解を育てる支援 実践障害児教育 11月号』株式会社学研プラス

3 研究の計画



III 研究の実際

1 研究主題に関する基本的な考え方

(1) 「自己理解を深め、課題に気付き解決する」とは

自己理解とは、生徒が自分のよいところも悪いところも含めて自分であると自己を肯定的に捉えたり、他者との比較によって自己を客観的に捉えたりすることで、自分について理解することとした。

障害のある生徒が自己理解を深めていくことが、障害による特性や学習面又は生活面における課題に気付くことにつながり、自分がどのように行動していくべきなのかを考えることで課題を解決することになる。

(2) 知的障害のある子供の自己理解の特性

子供の自己理解の発達には、幼児期から青年期にかけて、外見的事実から内面的なことへと深化していき、9、10歳頃になると客観的な他者との比較が可能になり、他者との比較をする中で自分を理解するとされている。そして、他者との関係性に影響を受けたり、子供自身の経験によって変わったりするとされる。さらに、成長とともに過去、現在、未来といった時間の中で自分自身を捉えることが可能になることから自己理解が深まっていくとされている（小島³⁾，2015）。

しかし、知的障害のある子供は、自分を客観的に捉え、他者との比較を行い、自己の様々な側面について理解することは難しいことがあるとされ、将来の自分のイメージをしたり、過去の自分を振り返ったりすることにも苦手さがあると指摘されている（小島・片岡⁴⁾，2020）。このことから、知的障害のある子供が自己理解を深めていくためには、教師が生徒の特性を考慮した上で支援を行うことが必要だと考える。

(3) 知的障害のある子供の自己理解の支援と指導

知的障害のある子供は、これまでの失敗経験や他者との比較により否定的な自己理解になりやすいことから、自分のよさについて気付くための支援が必要とされる。そして、自分のよさだけでなく、苦手なところなど自分の色々な側面に気付くための支援をしたり、過去、現在、未来といった時間軸を抱くための支援をしたりすることが求められる。さらには、他者との関わりを通して自己理解を深めることが大切であると指摘されている（小島・片岡⁴⁾，2020）。

そこで、知的障害のある子供の自己理解を深めるための必要な支援を踏まえ、本研究における授業づくりでは、「自己理解の指導・支援に関する5つのポイント」（「なりたい自分について考える」、「自分の良いところ、課題となるところ等を理解する」、「自分に必要な対応を理解する」、「成功体験の積み重ね、自信をもつ」、「自己肯定感をもつ」）（国立特別支援教育総合研究所⁵⁾，2021）を参考にして、生徒の自己理解を図るための授業づくりに取り組むこととする。

4) 小島道生・片岡美華（2020）『発達障害・知的障害のある児童生徒の豊かな自己理解を育むキャリア教育内面世界を大切に授業プログラム45』（初版第3刷） ジアース教育新社

5) 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（2021）『もしかして、それ…二次的な障害を生んでいるかも…？』 http://www.nise.go.jp/nc/report_material/research_results_publications/leaflet（2021年11月30日閲覧）

(4) 自立活動について

ア 自立活動とは

特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編（幼稚園・小学部・中学部）¹⁾（以下、「解説自立活動編」）には、「個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を養う。」と目標が示されている。このように、障害のある生徒は、その障害によって、日常生活や学習場面において様々なつまづきや困難が生じる（図1）ことから、個々の障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服するための自立活動の指導が必要とされている（図2）。自立活動を進めていくことで、発達の遅れや不均衡を改善したり、発達の進んでいる側面を更に伸ばしたりすることによって、遅れている側面の発達を促すとともに全人的な発達を促進することになる。

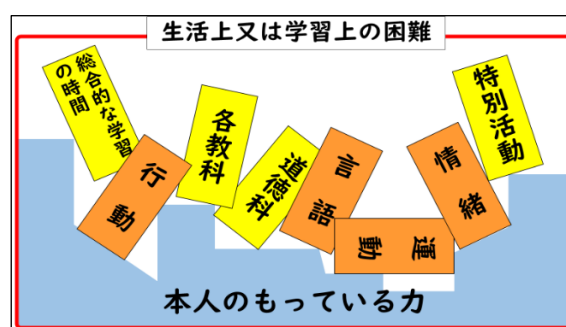


図1 障害のある生徒の実態（イメージ）



図2 自立活動の役割（イメージ）

イ 自立活動の内容とその取扱いについて

自立活動の内容は、「人間としての基本的な行動を遂行するために必要な要素」と「障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服するための必要な要素」で構成されている。それらの内容については、六つの区分の下に分類・整理している（図3）。そして、この六つの区分の内容は、それぞれ3～5項目ずつ、計27の項目で示されている（p. 4、表1）。

自立活動の指導に当たっては、個々の生徒の実態把握に基づき、自立を目指して設定される指導目標を達成するために、個別の指導計画を作成し、自立活動の内容から必要な項目を選定し、それらを相互に関連付けて具体的な指導内容を設定する。そして、自立活動の時間や教育活動全体で指導する必要がある。

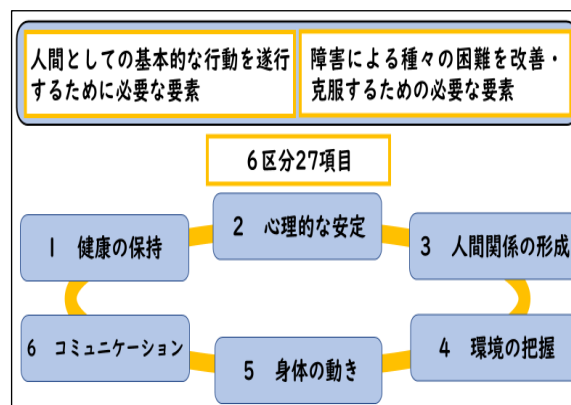


図3 自立活動の内容の考え方

ウ 自立活動を通じた自己理解について

本研究では、「自己理解を深め、課題に気付く解決する生徒の育成」に向けて自立活動に取り組むこととする。

自立活動の指導は、障害による学習上又は生活上の困難と向き合い、その困難の改善・克服を目指す指導であるから、自己に対するイメージの形成に深くかかわることになる。そこで、自分のよいところも悪いところも含めて自分であると自己を肯定的に捉えたり、他者との比較や何らかの基準によって客観的に捉えたりすることが必要であり、発達の段階に応じて適切に指導することが求められると示されている（文部科学省¹⁾，2019）。

このことから、教師が自立活動において適切に指導することが、本研究の主題である「自己理解を深め、課題に気付く解決する生徒の育成」につながると考える。

表 1 自立活動の内容（6区分 27項目）

1 健康の保持	2 心理的な安定
(1) 生活のリズムや生活習慣の形成に関すること。 (2) 病気の状態の理解と生活管理に関すること。 (3) 身体各部の状態の理解と養護に関すること。 (4) 障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること。 (5) 健康状態の維持・改善に関すること。	(1) 情緒の安定に関すること。 (2) 状況の理解と変化への対応に関すること。 (3) 障害による学習上又は生活の困難を改善・克服する意欲に関すること。
3 人間関係の形成	4 環境の把握
(1) 他者とのかかわりの基礎に関すること。 (2) 他者の意図や感情の理解に関すること。 (3) 自己の理解と行動の調整に関すること。 (4) 集団への参加の基礎に関すること。	(1) 保有する感覚の活用に関すること。 (2) 感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること。 (3) 感覚の補助及び代行手段の活用に関すること。 (4) 感覚を総合的に活用した周囲の状況についての把握と状況に応じた行動に関すること。 (5) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること。
5 身体の動き	6 コミュニケーション
(1) 姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること。 (2) 姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用に関すること。 (3) 日常生活に必要な基本動作に関すること。 (4) 身体の移動能力に関すること。 (5) 作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること。	(1) コミュニケーションの基礎的能力に関すること。 (2) 言語の受容と表出に関すること。 (3) 言語の形成と活用に関すること。 (4) コミュニケーション手段の選択と活用に関すること。 (5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること。

文部科学省（2019）『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編（幼稚園・小学部・中学部）』参照

エ 自立活動の教育課程上の位置付け

解説自立活動編¹⁾に、自立活動の指導は「障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服し、自立し社会参加する資質を養うため、自立活動の時間はもとより、学校の教育活動全体を通じて適切に行うものとする。」と示されている。

つまり、自立活動の指導は、各教科等の指導と密接な関連をもち、学校の教育活動全体を通じて行うものであり、自立活動の時間における指導は、その一部である（図4）。

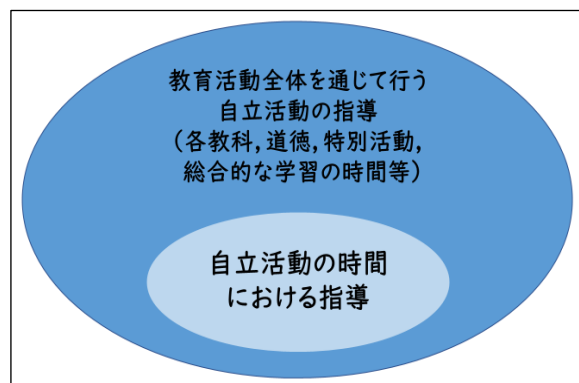


図4 自立活動の指導の位置付け

2 実態調査及び考察

(1) 実態把握の方法

本研究では、特別支援学級に在籍する生徒全員と教職員に対して「自立活動に関する実態調査」を行い、自立活動の取組に関する課題を明確にする。

(2) 実態調査の概要

調査目的	自立活動の取組に関する課題を明確にし、研究の基礎資料とする。
調査対象	さつま町立宮之城中学校特別支援学級生徒24人、教職員7人
実施時期	令和3年6月7日
実施方法	質問紙による「自立活動に関する実態調査」

(3) 本校の実態

ア 生徒の自己理解について

「自分のことについて自分で理解できていますか。」という質問に対して、79.1%の生徒が理解できていると答えている（図5）。

イ 生徒の課題認識

「自分の課題に気付くことができていますか。」という質問に対し、41.6%の生徒が自分の課題に気付くことができていないと答えている。それに対して、85.7%の特別支援学級担任が生徒は課題に気付くことができていないと答えている（図6）。

ウ 自立活動について

「特別支援学級担任として、困っていることや悩んでいること」について質問したところ、「自立活動が計画的に進んでいない。」「個に応じた指導ができていない。」「自立活動の時間にどういった活動をすればいいのか分からない。」といった回答が見られた。

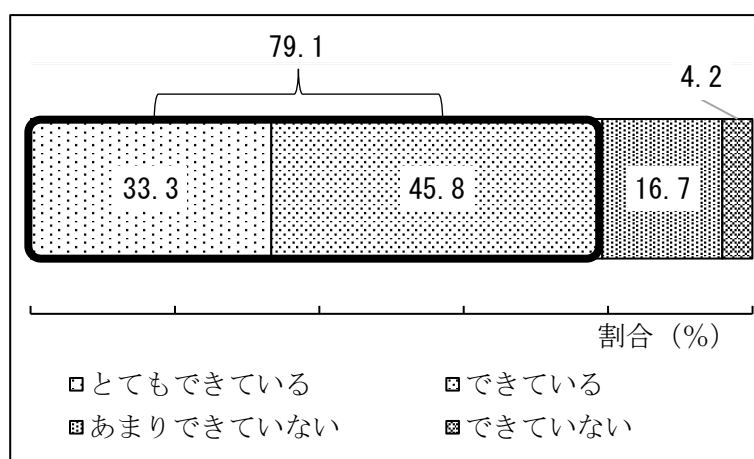


図5 生徒の自己理解について

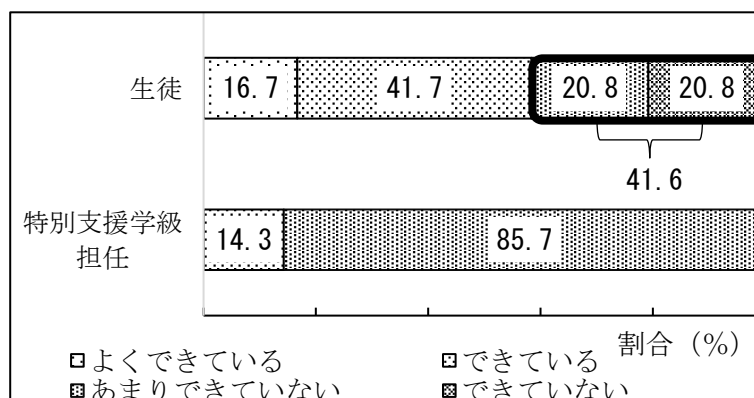


図6 生徒の課題認識

(4) 考察

実態調査の結果を見ると、「自分のことを理解できている」と回答している生徒に対しても、ほとんどの特別支援学級担任が、「生徒は自分の課題に気付くことができていない」と捉えており、生徒と特別支援学級担任の課題に対する認識のずれが生じていることが分かる。そして、「自分のことを理解できている」としている79.1%の生徒の中にも、「自分の課題に気付くことができていない」生徒がいることが分かる。

このことから、生徒が考える自己理解は表面的なもので、課題を認識するまでには至っておらず、自分のことを客観視できていないと考えられる。

また、特別支援学級担任は、自立活動の授業の進め方や指導方法、活動設定で悩んでいることが分かった。この背景には、特別支援学級担任は、生徒の課題に合わせて自立活動の授業づくりをする必要がある。しかし、生徒との課題に対する認識のずれがあることから、生徒は自分の課題に気付くことができなかったり、現在自立活動で取り組んでいる内容が自分の課題を解決することにつながるという実感がなかったりするため、主体的に活動に取り組めていないことがあると考えられる。

そこで、生徒が自分を客観的に捉えて自己理解を深め、課題に気付き解決できるようにしていくことが必要である。そのために、特別支援学級担任は、自立活動を中心とした授業において生徒の実態に応じた活動設定を行い、具体的な手立てを立案することが重要であり、生徒が客観的に自己を振り返ることができるようにしていくことが必要であると考えられる。

3 生徒の自己理解を図るための自立活動を中心とした授業づくり

(1) 授業づくりのイメージ

生徒の自己理解を図るために、「自己理解の指導・支援に関する5つのポイント」(国立特別支援教育総合研究所⁵⁾, 2021)を基に授業づくりを次のように考える(図7)。自立活動における取組では、生徒が自分のよさや課題を客観的に理解し、なりたい自分を考え、自分の課題に必要な対応を理解することができるようにする。そして、主に自己の振り返りにおける取組では、生徒が自分を客観的に見て、自分のできることに気付いたり、自分を肯定的に捉えたりできるようにする。これらの取組を繰り返していくことが、自己理解を深め、課題に気付き解決することにつながるのではないかと考える。

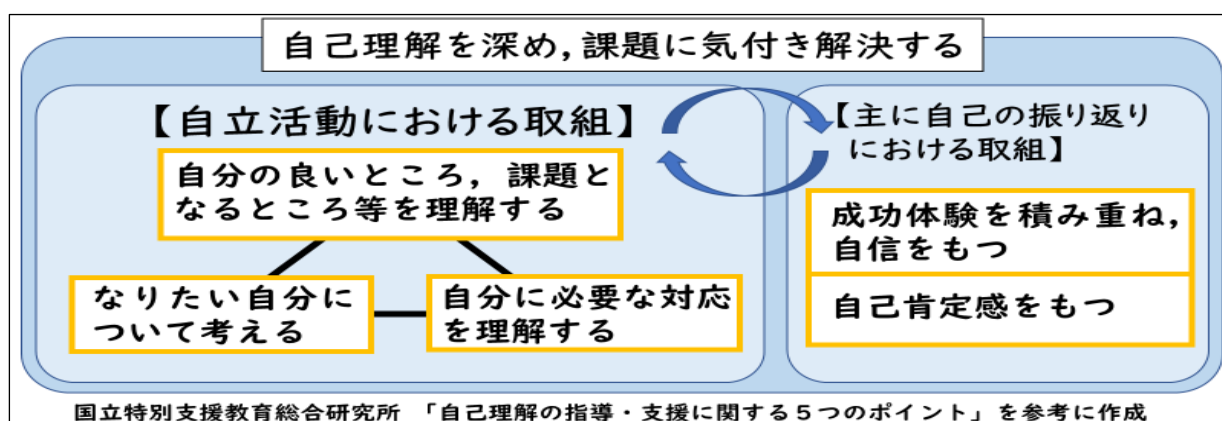


図7 授業づくりのイメージ

(2) 自立活動の活動設定における工夫

解説自立活動編¹⁾において自立活動の指導について次のように示されている。

自立活動の指導は、個別指導の形態で行われることが多いが、指導目標(ねらい)を達成する上で効果的である場合には、幼児児童生徒の集団を構成して指導することも考えられる。

自己理解は他者との関わりを通して深まるものと捉えていることから、本研究において自立活動を集団で取り組むことは効果的であると考ええる。

集団で取り組む自立活動において、生徒一人一人の課題を自立活動の内容に合わせて整理していくと共通する課題や個別の課題がある。そこで、本研究では共通する課題を中心として取り扱いながら、活動設定の工夫を行い、授業づくりに取り組む。そして、個別の課題に対しては、全体の活動の中で生徒の実態に応じた手立てを講じたり、学校生活において個別に指導したりしていく。

(3) 自立活動の学習過程における目指す生徒の姿と具体的な手立て

生徒が自己理解をするためには、自分の課題に気付き、主体的に授業に取り組むことが必要だと考える。そこで、自立活動の学習過程において、導入の場面では、生徒が自分の課題に気付くようにする。そして、展開の場面では、その課題を解決していくために、生徒が集団の特性を生かし友達と一緒に考えたり、自分で考えたりする。さらに、終末の場面では学習を通して生徒が考えたことをまとめる。このような流れで学習を進めていく。

授業づくり、活動設定の工夫を踏まえ、この学習過程のそれぞれの場面における目指す生徒の姿と具体的な手立てを次のように考える。

ア 【導入】課題への気付き

目指す生徒の姿	具体的な手立て
○ 「～のためにこの活動に取り組む。」、「自分は～する必要がある。」のように自分の課題に気付く姿	○ 生徒が活動のねらいを確認し、目的をもって活動に取り組むことができるように資料提示や場面設定をする。

イ 【展開】考える

目指す生徒の姿	具体的な手立て
○ 友達と協力したり，意見交換したりすることで「～できた。」，「自分で～している。」という気持ちになり，学習への意欲を高め，主体的に取り組む姿	○ 活動に取り組む際は，生徒が友達と協力して活動する場面を設定する。 ○ 個人で考えたことを友達に伝えたり，友達の考えを聞いたりする意見交換の場面を設定する。

ウ 【終末】まとめる

目指す生徒の姿	具体的な手立て
○ 「～のときは～すればいいのか。」，「次は～しよう。」と学習したことが学校生活に生かされることに気付く姿	○ 生徒が学習したことを振り返り，学校生活において生かせることは何かを考えることができるように言葉掛けをする。

このように，学習過程において具体的な手立てを講じることで，生徒が自分の課題に気付き，活動に目的をもって取り組むことができる。そして，友達と協力して活動したり，意見を交換したりすることを通して自分の考えを深め，学習したことが学校生活でどのように生かせるのかをまとめることができる。このような学習過程を繰り返し積み重ねていくことは，生徒が自分のことについてより深く考えることにつながり，自己理解が深まり，課題に気付き解決していくことにつながると考えられる。

4 学校生活における自己の振り返りの在り方

(1) 知的障害のある児童生徒の学習上の特性について

特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（小学部・中学部）⁶⁾では，知的障害のある児童生徒の学習上の特性として次のように示されている。

学習によって得た知識や技能が断片的になりやすく，実際の生活の場面の中で生かすことが難しいことが挙げられている。そのため，実際の生活場面に即しながら，繰り返して学習することにより，必要な知識や技能等を身に付けられるようにする継続的，段階的な指導が重要となる。また，成功経験が少ないことなどにより，主体的に活動に取り組む意欲が十分に育っていないことが多い。

このことから，学習したことを基に学校生活における自己の振り返りに継続して取り組み，自分を客観的に捉え，自分のできたことやできていないことを認識することが，自己理解を深め，課題に気付き解決することにつながると考える。

また，知的障害のある児童生徒は，自分自身のよさや苦手なことを客観的に捉え理解することが難しいことから，周りの教師の関わりが大切である。教師は，児童生徒が「こうすればできる。」，「これがあれば大丈夫。」と自己を振り返ることができるように，生徒一人一人のよさを伝えたり，苦手なことに対して「どうすればいいのか。」を一緒に考えたりしていくことが必要である。

(2) 学校生活における自己の振り返り

学校生活における自己の振り返りを，振り返りシート（図8）を活用し，行うことで，生徒は，自立活動で学習したことによって「何ができるようになったのか。」，「自分がどのように変容したのか。」のように自分を客観的に見ることができる。そして，自分を客観的に見ることができれば，自己理解を深め，自分のよさだけでなく課題に気付くことができ「次は～してみよう。」という学習上又は生活上の困難な状

【今週の頑張りたいこと】 （◎よくできた ○できた △もう少し）		月	火	水	木	金
①						
②						
③						
自分の反省						
交流学級担任から						
特別支援学級担任から						

図8 振り返りシート

6) 文部科学省（2018）『特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（小学部・中学部）』開隆堂出版株式会社

況を改善しようとする意欲をもつ。また、教師は特別支援学級担任と交流学級担任を中心に、学校生活における生徒の変容を見取り、生徒一人一人の指導目標に対する到達状況を把握し、指導目標、方法、内容の見直しを行うことで、生徒に対する適切な指導内容・方法の改善に結び付けることができる。さらに振り返りシートの活用を通して、教師間の情報共有を図ることもでき、生徒の実態に応じた指導につなぐことができる。

5 検証授業 I の実際

(1) 検証授業 I の視点

自己理解を深め、自分の課題に気づき解決する生徒の育成につながる授業づくりや自己の振り返りを検証するために以下の視点を設定した（表 2）。

表 2 検証授業における視点

【視点 1】生徒の自己理解を図るための授業づくり	① 集団で取り組む自立活動の活動設定 ② 自分の課題への気づき ③ 生徒同士での活動や意見交換などの場面設定 ④ 学習したことを生活場面につなげる振り返り
【視点 2】学校生活における自己の振り返りの在り方	① 生徒が自己を客観的に見る振り返りシートの活用 ② 生徒が自分のよさや苦手なことに気付くための取組

(2) 対象生徒の実態

対象とする生徒 A と生徒 B の実態を、特別支援学級担任や交流学級担任への聞き取り調査や個別の指導計画を基に行った結果、表 3 のような実態が明らかになった。

表 3 対象生徒の実態

	生徒の実態	障害の状態、発達検査等
生徒 A	- 決められたこと（ルール）は守ることができる。 - しなければならないことは頑張ろうと取り組む。 - 純粋な性格で、思いやりがある。 - 心配性で、物事についての確認を何度もする。 - 全てのことを頑張らないと思い、無理をする。 - 周りと同じように行動することが苦手で、着替えや移動教室の準備等に時間がかかってしまう。 - プリント類の整理や棚の整理整頓が苦手である。 - 気持ちの切り替えがうまくできないことがある。 - 相手のことを気にし過ぎてしまう。 - 大きな音が苦手で、大勢のいる場では落ち着かない。 - 交流学級では周りの友達が声を掛けてくれるが、自分から話すことができないことに悩んでいる。	- 知的障害 - 自閉スペクトラム症 - WISC-III (令和元年7月26日実施) 全検査IQは軽度知的障害に該当する値であり、言語性IQと動作性IQに有位差は見られなかった。 - 療育手帳（B 2）
生徒 B	- 長時間立つことはできないので、朝会等では椅子に座っている。 - 部活動にも参加し、学校生活において友達との関係も築くことができている。 - 交流学級で受けている授業において周りと同じように授業に参加することができている。 - 学校生活における行動が、全て受け身で自分から行動を起こすことがない。 - コミュニケーションをとることが苦手であり、自分から友達に話し掛けたり、先生に質問したりすることが少ない。 - まとまりのある文章を書くことが苦手である。 - 自分の考えや思いを表現することは苦手である。 - できないと思うとすぐに諦めてしまうことがある。 - 細かい作業は苦手である。	- 知的障害 - 脳性まひ・左内反尖足 - WISC-III (令和元年7月23日実施) 全検査IQは軽度知的障害に該当する値であり、言語性IQと動作性IQに有位差は見られなかった。 - 療育手帳（B 1）

表3の対象とする生徒Aと生徒Bの実態を基に、自立活動における指導課題は以下のとおりである（表4）。

表4 対象生徒の自立活動における指導すべき課題

	指導すべき課題
生徒A	- 自分の特性を理解していないためにできないことも無理して頑張ってしまう。 - 他人の目や評価を気にするため、集団生活の中で落ち着かない。 - 集団生活において、周りに合わせた行動（移動教室等）ができない。 - 音に敏感であるため、騒がしい集団の中で過ごすことが苦手である。 - 相手のことを気にし過ぎて自分から声を掛けたり、頼ったりすることができない。
生徒B	- 通院等を通して自分の足の状態は分かっているが、進んでストレッチなど身体のケアに取り組んでいない。 - 自分のよさやできることに気付いていないため、周りの友達に頼りっきりになってしまい、自分から行動を起こしたりすることが少ない。 - 色々と考えていることや思っていることはあるが、自分から進んで自分の考えや思いを周りの人に話すことはない。

このような、指導すべき課題を明確にして指導目標を設定した。そして、指導目標を達成するために必要な自立活動の内容（p. 4、表1参照）を選定し（表5）、具体的な活動内容を設定した。表5の網掛けになっている部分は生徒Aと生徒Bの共通する自立活動の内容である。

表5 指導目標と指導目標を達成するための項目選定

	指導目標					
	- 自分ができないことではなくできることに目を向け、何事にも前向きに取り組むことができる。 - 自分の特性について理解し自分の今の状態を的確に把握し、相手に伝えることができる。					
	指導目標を達成するために必要な項目の選定					
	1 健康の保持	2 心理的な安定	3 人間関係の形成	4 環境の把握	5 身体の動き	6 コミュニケーション
生徒A	(4) 障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること。	(3) 障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること。	(3) 自己の理解と行動の調整に関すること。 (4) 集団への参加の基礎に関すること。	(2) 感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること。	(5) 作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること。	(5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること。
	指導目標					
	- 自分のよさに気づき、何事にも自信をもって活動に取り組むことができる。 - 自分の思っていることや考えていることを伝えられるようにする。					
	指導目標を達成するために必要な項目の選定					
	1 健康の保持	2 心理的な安定	3 人間関係の形成	4 環境の把握	5 身体の動き	6 コミュニケーション
生徒B	(3) 身体各部の状態の理解と養護に関すること。	(3) 障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること。	(3) 自己の理解と行動の調整に関すること。		(5) 作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること。	(3) 言語の形成と活用に関すること。

対象生徒の実態から、生徒Aと生徒Bが自立活動の内容で共通する項目は「2心理的な安定の(3)障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること。」「3人間関係の形成の(3)自己の理解と行動の調整に関すること。」「5身体の動きの(5)作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること。」(表5の網掛け部分)ということが分かる。そこで、検証授業では、この共通する内容を中心に自立活動の活動設定を行った。また、個々で違う内容については、集団で取り組む活動の中において個への手立てを講じたり、学校生活で個別に指導したりすることとした。

(3) 授業づくりの実際

ア 検証授業Ⅰの概要

自立活動の個別の指導計画における生徒一人一人の指導目標を基に、生徒同士で共通する自立活動の内容を中心に、自立活動における具体的な活動内容を次のように設定した(表6)。

表6 検証授業Ⅰにおける具体的な活動内容 視点1－①

実施時期	令和3年7月6日～9日実施	
対象生徒	知的障害特別支援学級に在籍する中学校第2学年	
活動名	「自分らしさ見付けるためには？」(自立活動)	
全体目標	ア 自分を客観的に見る、周りから見た自分を知るといった活動を通して、自分のよさやできることを認識し自己理解を深めることができる。 イ なりたい自分を見付け意識することで、生徒自身が個々の課題に気付くことができる。 ウ 自分のことを適切に表現したり、伝えたりすることができる。	
個人目標	生徒A	ア 自分のよさやできることを認識しなりたい自分を見付け、自分自身の課題に気付くことができる。 イ 自分のことについて、相手に分かるように伝えることができる。
	生徒B	ア 自分のよさやできることに気付くことで自ら進んで活動に参加し、なりたい自分を見付け自分自身の課題に気付くことができる。 イ 自分の考えを表現したり、みんなに伝えたりすることができる。
	ねらい	活動内容
1時間目	・ 自分のよさやできることを見付けよう。	・ 今の自分について振り返る。 ・ 友達に自分のことについて聞く。
2時間目	・ 新たな自分の一面を見付けよう。	・ 周りの人たちに自分のよさについてインタビューする。
3時間目	・ なりたい自分を見付けよう。	・ なりたい自分を考える。
4時間目	・ なりたい自分を実現するために必要なこと(課題)を見付けよう。	・ 実現するために必要なこと(課題)や解決するための取組を考える。

(4) 授業の実際

ア 検証授業Ⅰの視点における取組

検証授業Ⅰにおける視点1・2に対する具体的な取組を考え、「自己理解を深め、課題に気付き解決する生徒の育成」につながる授業づくりや自己の振り返りを検証することとした(表7, 8 (p.11参照))。

表7 【視点1】 生徒の自己理解を図るための授業づくり

学習過程	視点に対する取組
【導入】 課題への 気付き 視点1－②	○ 生徒が活動のねらいを自分事として捉え、活動の目的をもって活動に取り組むことの必要性を感じることができるよう、次の取組を行う。 ・ 生徒が「何を学習するのか。」「何のために今回の活動に取り組むのか。」を理解し、活動のねらいと自分の課題がつながることに気付くように、生徒の学校生活における具体例を視覚的に示しながら、活動のねらいの確認を行う。

【展開】 考える 視点 1－③	○ 教師が活動内容と個別の課題を関連付け、どのような手立てが必要なのかを検討し講じることで、生徒が自分について考えたり、自分の考えを深めたりすることができるように、次の取組を行う。 ・ 集団で活動を進めていく中で、個別の課題に対する教材や教具を準備したり、場面設定をしたりする。
【終末】 まとめる 視点 1－④	○ 生徒が学習したことと実際の生活場面とのつながりに気付き、学校生活において取り組もうとする意欲を高めることができるように、次の取組を行う。 ・ 「何を学習したか。」「学習してどのようなことを考えたか。感じたか。」「今後、どうするか。」といった内容で毎時間の終末の場面において全体で確認し、ワークシートに自分の考えをまとめる。 ・ 教師は、生徒が、「今後、どうするか。」という部分について着目し学習したことを生活場面とつなげられるような言葉掛けをする。

表 8 **【視点 2】 学校生活における自己の振り返りの在り方**

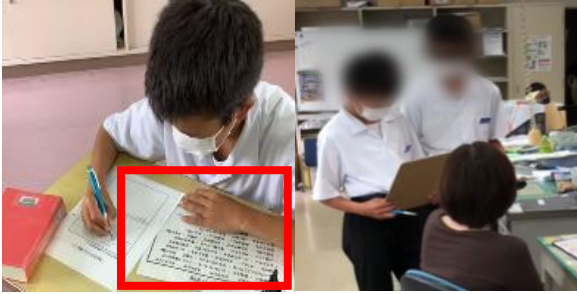
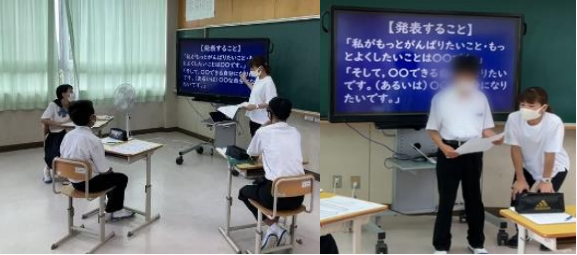
	視点に対する取組
生徒 視点 2－①	○ 自分のことを客観的に振り返ることができ、自己理解を深め、新たな課題に気付くことができるように、次の取組を行う。 ・ 授業で学習したことを基に、学校生活で頑張りたいことを生徒が考え、三つ決める。 ・ 決めた学校生活で頑張りたいことを振り返りシートに記入し、毎日、自己の振り返りを行う。 ・ 自己の振り返りを基に一週間の反省を記入する。
教師 視点 2－②	○ 生徒が気付いていない自分のよさやできることや課題に気付くことができるようにしたり、教師間の生徒に関する情報共有につながるようにしたりするために、次の取組を行う。 ・ 生徒の自己の振り返りや反省に対して、学級でできていたことや頑張っていたことなどについてコメントをする。 ・ 特別支援学級担任と交流学級担任で生徒の振り返りシートの確認を通して、生徒の様子についての情報共有を行う。

イ 検証授業 I の実際

【視点 1】 生徒の自己理解を図るための授業づくり

特別支援学級 中学校第 2 学年 自立活動 「自分らしさを見付けるためには？」

過程	主な学習活動	指導の工夫（具体的な取組）
導入	1 本時の流れを確認する。 2 活動のねらいを確認する。 【ねらい】 自分のよさやできることを見付けよう。  【生徒の姿】 ・ 活動のねらいと自分自身の課題がつながることに気付き、目的をもって活動に参加することができる。	【教師の取組】 視点 1－② ○ 生徒が「何を学ぶのか。」「何のために活動に取り組むのか。」を理解し、活動のねらいと自分の課題がつながることに気付き、自分事として捉えられるように、生活場面における具体例を視覚的に提示しながら確認する。

展開	考える	3 自分で考えたり，活動したりする。  写真2 実際の活動の様子 【生徒の姿】 - 自分の考えを表現することができたり，友達と協力してコミュニケーションをとることができたりする活動を通して，個別の課題を克服しようと主体的に活動に取り組むことができる。 4 自分の考えを発表する。  写真3 発表についての確認と発表の様子 【生徒の姿】 「みんなの前で発表することができた。」という気持ちになり，学校生活において相手に自分の考えを伝える場面で生かすことにつながる。	【教師の取組】 視点1－③ - 自分の考えをうまく表現することを苦手としている生徒に対して，言葉で表現できるようにヒントになる言葉を書いた教材（写真2の枠で囲んでいるもの）や，分からない言葉を調べることができるように国語辞典を準備したりする。 - コミュニケーションを苦手としている生徒に対して，インタビューする場面を設定する。インタビューの仕方の確認を行い，友達と協力することでインタビューをスムーズに実施できるようにする。 【教師の取組】 視点1－③ - 発表する内容の確認（何を発表するのか）や，発表する際の留意点（声の大きさ，発表するときの姿勢や視線等）を具体的に提示することで，発表する際のイメージをもつことができるようにする。そして，自分の考えをしっかりと相手に伝えることができるようにする。
終末	まとめる	5 本時を振り返る。  写真4 振り返りの様子 【生徒の姿】 「学校生活で～してみよう。」と学習したことが実際の生活場面とつながっていることに気付くことができる。	【教師の取組】 視点1－④ - 生徒が学習したことを基に，自分の考えを整理できるように，全体で振り返りを行う。その後，個人で振り返りを行う。 - 生徒に対し，「これからの学校生活でどうするべきか。」のように生活場面とつながりに気付き，関係付けることができるような言葉掛けを行う。

【視点2】 学校生活における自己の振り返りの在り方

- 検証授業Ⅰでは、4時間目の後に、生徒が学習したことを基に、学校生活で頑張りたいことを決め、下記のような流れで自己の振り返りを行った。そして、生徒の自己の振り返りシートを活用して、特別支援学級担任と交流学級担任が生徒の情報を共有できるような取組につながるようにした（図9）。

生徒の取組 視点2-①

(1) 学習したことを基に、学校生活で頑張りたいことを三つ決めて振り返りシートに記入する。

【今週の頑張りたいこと】 (◎よくできた ○できた △もう少し)	月	火	水	木	金
① なにか、おもしろいと思えること	△	△	△	△	△
② えがおでいる。	△	△	△	△	△
③ あいさつをする。	○	△	△	△	△

(2) 毎日の学校生活における自己を「◎よくできた」、「○できた」、「△もう少し」で振り返る。

(3) 一週間を通じた自己の振り返りを基に、自分の反省を記入する。

自分の反省	あまりあやまらなかった。
交流学級担任から	楽しそうにニコニコしている姿も見られましたよ。自分にもっと優しくしてもいいですよ。
特別支援学級担任から	ネガティブに考えずに、ポジティブに考えられると良いですね！できたことに自信を持ちましょうね！

図9 生徒の振り返りシート

教師の取組 視点2-②

○ 生徒が一週間を通して取り組んだ振り返りシートにコメントを記入する。

○ 記入する内容は、本人が学級で頑張っていることやできていたことを記入する。

(5) 検証授業Ⅰの成果と課題

	成 果	課 題
視点1	○ 活動のねらいを具体的な生活場면을提示して確認したことで、生徒が目的をもち活動に取り組むことができた。 ○ 個別の課題に対する教材・教具の準備、場面設定をしたことで生徒が活動に取り組むことができた。 ○ 学習したことと生活場面のつながりに気付くような言葉掛けにより、生活場面でどうするかを考えさせることができた。	● 生徒が活動のねらいと自分の課題とのつながりに気付くまでは至らなかった。 ● 生徒が活動できるようにするための手立てが中心だった。そのため、活動が教師主導になり、生徒が主体的に取り組む活動になっていなかった。 ● 教師が生徒の実態を的確に把握できていなかったため、教師が講じた手立てが機能していない場面が見られた。
視点2	○ 振り返りシートの活用を通して、生徒が学校生活において学習したことを意識する姿が見られた。 ○ 振り返りシートを活用したことで、特別支援学級担任と交流学級担任が生徒の様子を意識して見取ることがつながった。	● 生徒が学校生活で頑張りたいことの内容が抽象的だったり、どのように振り返るのが明確でなかったりしたため、自己の振り返りがうまくできず、自己理解を深めることに至らなかった。 ● 教師が生徒のどのような様子を見取ればよいのが明確になっていなかった。

(6) 検証授業Ⅱへ向けて

検証授業Ⅰの成果と課題を基に、検証授業Ⅱでは、次の三つのことについて取り組む。

ア 1単位時間の中で、個別の課題にも対応していくために個人の活動の時間と集団で共通する課題に取り組む時間を別々に設定する。



写真5 活動の様子

- ・ 集団での自立活動において共通の課題を中心に取り組む中で、個別の課題にも対応するための教材の準備や活動場面の設定を行ったが、自分と向き合い、自分の課題に気付くまでには至らなかった。

- ・ 1単位時間の中で、個別の課題にも取り組むことができるように個人の活動の時間を設定することで、自分の課題に気付くことができるようにする。

イ 学習過程において生徒が主となる活動や生徒同士での活動を設定する。そして、個への手立てが必要な手立てであるのかを整理する。

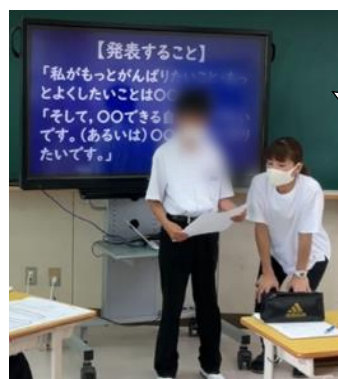


写真6 発表の場面

- ・ 生徒の実態と教師が考えた個への手立て(発表する場面における言葉掛け)が合っていなかったため、生徒の発表する声がだんだんと小さくなっていった。

- ・ 教師は生徒の実態を的確に把握し、活動場面においてどのような手立てが必要なのかを考える。
- ・ 生徒が中心となり活動したり、生徒同士で意見交換したりすることで主体的に活動に参加できるようにする。

ウ 自己の振り返りにおける判断基準を明確にし、生徒と教師間で共有する。

【今週の頑張りたいこと】 (◎よくできた ○できた △もう少し)	月	火	水	木	金
① 何か面白いと思ったら笑う。	△	△	△	△	△
② 笑顔でいる。	△	△	△	△	△
③ あいさつをする。	○	△	△	△	△

図10 生徒の振り返りシートの一部

- ・ 頑張りたいことの内容が抽象的だったため、自己の振り返りをうまく進めることができなかった。

- ・ 頑張りたいことを具体的な内容にする。そして、「◎、○、△」の判断基準を教師と生徒で決める。

6 検証授業Ⅱの実際

(1) 検証授業Ⅱの視点

検証授業Ⅰ同様の視点(p. 8, 表2)で検証授業に取り組む。

(2) 授業づくりの実際

ア 検証授業Ⅱの概要

検証授業Ⅰと同様に、生徒一人一人の個別の指導計画を基に、次のように自立活動における活動内容を設定した(p. 15, 表9)。また、検証授業Ⅱでは、学習後の自己の振り返りにおいて、生徒が自分をより客観的に見るができるように、事後学習で教師との個別面談を設定した。個別面談では、生徒が決めた学校生活で頑張りたいことを具体的な内容にして、生徒が自己を振り返る際の判断基準を設定して教師と生徒で共有することとした。

表9 検証授業Ⅱにおける具体的な活動内容 視点1－①

実施時期	令和3年10月27日～11月2日	
対象生徒	知的障害特別支援学級に在籍する中学校第2学年	
活動名	「交流学級でできることを増やすためには？」（自立活動）	
全体目標	ア 交流学級での自分の振り返りを通して、できていないこともあることに気づき、解決方法を見付けることができる。 イ 学校生活における苦手な場面について友達との話し合いを通して、どのように行動すればいいのかを見付けることができる。 ウ 話し合い活動を通して、相手の意見を聞き、自分の考えを適切に表現したり、伝えたりすることができる。	
個人目標	生徒A	ア できていないことに対して、周りの友達の意見を参考にしながら、学校生活で頑張りたいことを決めることができる。 イ 話し合い活動では、友達の話をただ聞くのではなく、自分の意見も二つ以上は伝えることができる。
	生徒B	ア できていないことの解決方法を友達と協力して考えをまとめ、学校生活で頑張りたいことを決めることができる。 イ 話し合い活動で、自分の考えを一つは相手に伝えることができる。
	ねらい	活動内容
1 時間目	・ 学級での役割って何だろう？	- 交流学級での役割について - 専門部活動の仕事について
2 時間目	・ 自分の役割を果たすためには？	交流学級での自分の役割を果たすために必要なことについて
3 時間目	・ こんなときはどうすればいい？	集団生活における苦手な場面の解決方法について
事後学習	・ 学校で頑張りたいことを決める。（個別面談の実施）	「学校生活で頑張りたいこと」を具体化して、判断基準を設定する。

(3) 授業の実際

ア 検証授業Ⅱの視点における取組

検証授業Ⅱにおける視点1・2に対する具体的な取組を考え、「自己理解を深め、課題に気づき解決する生徒の育成」につながる授業づくりや自己の振り返りを検証することとする(表10, 11 (p.16参照))。

表10 【視点1】 生徒の自己理解を図るための授業づくり

学習過程	視点に対する取組
【導入】 課題への 気づき 視点1－②	○ 生徒が活動のねらいを自分事として捉え、活動の目的をもって活動に取り組むことの必要性を感じることができるように、次の取組を行う。 自分のよさや苦手なことと向き合うことができるように、個別の課題に対して取り組む個人の活動の時間を設定する。そして、生徒が自分で活動内容を選択して取り組むことができるように個別の課題に対する活動を準備する。さらに、生徒が自分の課題に気づくことができるように、終末の場面で個人の活動についての振り返りを行う。
【展開】 考える 視点1－③	○ 教師が活動内容と個別の課題を関連付け、どのような手立てが必要なのかを検討し講じることで、生徒が自分について考えたり、自分の考えを深めたりすることができるように、次の取組を行う。 教師はこれまでの活動の様子や振り返りシートから、生徒にどのような手立てが必要なのかを検討する。そして、生徒同士での活動場面を設定し、活動する中で個別の課題に対応できるようにする。

【終末】 まとめる 視点 1－④	○ 生徒が学習したことと実際の生活場面とのつながりに気付き、学校生活において取り組もうとする意欲を高めることができるように、次の取組を行う。 - 生徒は「何を学習したか。」「学習して分かったことは何か。」「学校生活のこういった場面で生かせるか。」をまとめる。 - 生徒が「学校生活でこういった場面で生かせるか。」に着目し学習したことと生活場面をつなげることができるような言葉掛けを行う。そして、学校生活で取り組んでみようと思意欲を高められるように、個人で考えたことを共有する場面を設定する。
---------------------------------	---

表11 【視点 2】 学校生活における自己の振り返りの在り方

	視点に対する取組
生徒 視点 2－①	○ 自分のことを客観的に振り返ることができ、自己理解を深め、新たな課題に気付くことができるように、次の取組を行う。 - 教師と個別面談を行い、学校生活で頑張りたいことの具体的な内容についての確認を行い、自己の振り返りを行う際の判断基準を教師と一緒に設定する。 - 振り返りシートで、毎日の学校生活における自己の振り返りを行う。
教師 視点 2－②	○ 生徒が気付いていない自分のよさやできることや課題に気付くことができるようにしたり、教師間の生徒に関する情報共有につながるようにしたりするために、次の取組を行う。 - 個別面談を行い、学校生活で頑張りたいことを具体的な内容にして、生徒が自己を振り返る時にどういう状態であれば「◎よくできた、○できた、△もう少し」であるか判断基準を設定する。 - 生徒の振り返りシートを通して、特別支援学級担任と交流学級担任と交流学級での具体的な様子などについての情報共有を行う。

イ 検証授業Ⅱの実際

【視点 1】 生徒の自己理解を図るための授業づくり

特別支援学級 中学校第 2 学年 自立活動 「交流学級でできることを増やすためには？」

過程	主な学習活動	指導の工夫（具体的な取組）
導入 課題への気付き	1 個人の活動の取組  写真 7 個別の課題に対する取組  写真 8 生徒が課題を選択する様子	【教師の取組】 視点 1－② ○ 生徒が自己選択できるように、生徒一人一人の個別の課題に対する教材や教具を準備する。 （例） - コミュニケーション - 計画すること - 集団での過ごし方 - 書くこと ○ 最初の授業では、教師が活動の進め方を説明し、それ以降は、生徒が自分で考えて活動で取り組むものを自己選択できるようにする。

導入

課題への
気付き

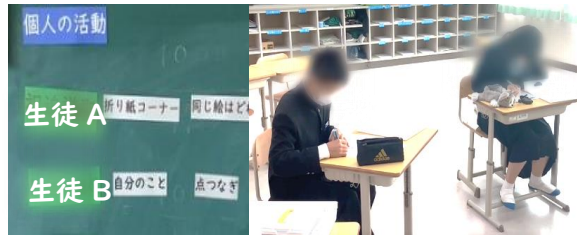


写真9 個人の時間の活動の様子

【2時間目】	
日付	令和3年10月29日(金) 曜日
個人の活動内容	
自分のこととつながり	
活動内容を選んだ理由	
自分のことについて考えたから	
個人の活動をやってみての感想	
いろいろなことを考えた	

図11 個人の活動の振り返り
(ワークシートの一部)

【生徒の姿】

- ・ 自分のよさや苦手なものと向き合い、自分のことについて考えることができる。
- ・ 個人の活動を振り返ることで、自分の課題に気付くことにつながる。

【教師の取組】 視点1-②

- 生徒が振り返ることができるように、個人の活動内容のプレートを準備し、黒板に貼るようにする。
- 生徒が自分の課題に気付くことができるように、終末の場面で、個人の活動の時間の振り返りを行う。

展開

考える

2 集団で活動する中で、自分で考えたり、活動したりする。



写真10 道具の準備を行っている様子



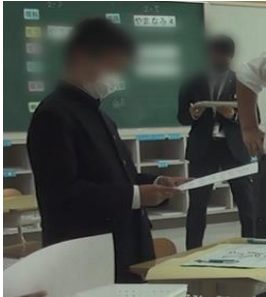
写真11 補助資料で調べている様子

【生徒の姿】

- ・ 生徒が活動を通して「～できた。」と感じ、学習に対する意欲を高めることができる。
- ・ 補助資料の活用を通して、学習していることが学校生活とつながることに気付き、自分の行動などについて考える。

【教師の取組】 視点1-③

- 自分から進んで話すことが苦手としている生徒に対して、生徒同士で協力して、プリントの受け渡しなどの準備を行うような活動場面を設定する。
- 活動において、生徒が「～している。」と感ずることができるよう、補助資料(写真11は交流学級の専門部一覧表)を準備し、生徒が自分で確認したり、調べたりする場面を設定し、生徒が主となる取組ができるようにする。

展開	考える	3 自分の考えを友達と共有する。  写真 12 意見交換をしている様子  写真 13 発表をしている様子 【生徒の姿】 - 自分の考えを伝えたり、友達の考えを聞いたりすることで、自分の考えを深めることができる。 - 発表の仕方についてイメージをもつことができ、相手に自分の考えを伝える際にはどうすればいいのかを理解することができる。	【教師の取組】 視点 1－③ - 生徒が、自分で考えを深めることができるように、友達に自分の考えを伝えたり、友達の考えを聞いたりする場面を設定する。 - 自分の考えを相手に伝えることを苦手としている生徒に対し、発表する場面を設定する。発表の仕方の内容(図 12)について「大きな声はどのぐらいなのか。」のように確認し、発表に取り組むことができるようにする。  図 12 発表の仕方の内容
終末	まとめる	4 本時を振り返る。  写真 14 自分のまとめを発表している様子 【生徒の姿】 学習したことが学校生活でどのような場面で生かせるのかを理解し、発表することで、生かしてみようと意欲を高めることにつながる。	【教師の取組】 視点 1－④ - 学校生活で生かせる場面に着目し、学習したことが学校生活につながることに気付くような言葉掛けを行う。 - 自分で考えたことをみんなに伝える場面を設定する。

【視点 2】 学校生活における自己の振り返りの在り方

生徒の取組（取り組む内容は検証授業Ⅰと同じ） 視点 2－①	
○ 検証授業Ⅱでは、3時間の自立活動後に事後学習に取り組み、生徒が学習したことを基に、学校生活で頑張りたいことを決める。そして、事後学習では、個別面談を実施する。	
(1) 学習したことを基に、学校生活で頑張りたいことを三つ決める。	(2) 個別面談を行い、内容の確認を行い、具体的な内容にする。
(3) 生徒が自己を振り返る際の判断基準を生徒と教師で設定する。	

個別面談の実際

【対象生徒Aの場合】

【学校生活で頑張りたいこと】

- ・ べんぎょうをかんばる
- ・ ポジティブに考える。
- ・ わらう(えがおで、いる)

図 13 活動用ワークシート

(T: 教師, A: 生徒A)

T: 「笑うときはどういうとき？」

A: 「人と話をしているとき…」

T: 「じゃあ交流学級で話をできる人は？」

A: 「います。〇〇ちゃん、〇〇ちゃんとか。」

T: 「じゃあ、笑うということにつなげるためには『友達と話す。』にする？」

A: 「そうします。」

T: 「1日何回とか決めますか？」

A: 「はい。1日3回にします。」

【今週の頑張りたいこと】
(◎よくできた ○できた △もう少し)

①	交流学級のしゅぎょうに、さんかする。	◎ (日 2回)
②	朝 一日の流れのかくにん。	◎ (日 1回)
③	友達と、話す。(1日3回)	◎ (日 3回)

図 14 個別面談後の振り返りシート
(判断基準は教師が記入)

- ・ 学校生活で頑張りたいことの内容を「どうすればこうなるのか。」を具体的に確認したことで、本人がイメージしやすいものになった。そして、自己の振り返りの際の判断基準も明確になった。

【対象生徒Bの場合】

【学校生活で頑張りたいこと】

- ・ 自分から仕事をさかす。
- ・ やりとりちょうをしっかりと書く。
- ・ 漢字をいいねいに書く。

図 15 活動用ワークシート

(T: 教師, B: 生徒B)

T: 「やりとり帳をしっかりと書くとは、やりとり帳を毎日書くということかな？」

B: 「はい。」

T: 「やりとり帳を書くのは7日間あるので、◎, ○, △はどうする？◎は7日としたら、○は何日にしますか？」

B: 「5日にします。」

【今週の頑張りたいこと】
(◎よくできた ○できた △もう少し)

①	自分から仕事をさかす。	◎ (7日)
②	やりとりちょうをしっかりと書く。	◎ (7日)
③	漢字をいいねいに書く。	◎ (5日)

図 16 個別面談後の振り返りシート
(判断基準は教師が記入)

- ・ 学校生活で頑張りたいことについて「何をどうするのか。」について具体的に内容を確認したことで、自己の振り返りの際の判断基準が「どのような場合は◎, ○, △なのか。」明確になった。

教師の取組 視点2-②

【今週の頑張りたいこと】
(◎よくできた ○できた △もう少し)

	月	火	水	木	金
① 自分から仕事をさかす	◎	◎	◎	◎	◎
② やりとりちょうをしっかりと書く	◎	◎	◎	◎	◎
③ 漢字をいいねいに書く	◎	◎	◎	◎	◎
自分の反省	前の週の人のプリントをいれてあげることができて、たまにお礼をすることがあった。				
交流学級担任から	直接のグループで活動していて、つたえ意見が採用され、グループの意見になったね！素晴らしいね。				
特別支援学級担任から	テストおつかひごさでした！頑張ったテスト勉強を褒めることができたね！また来週もがんばっていきなさい！				

図 17 生徒の振り返りシート

- 検証授業Ⅰと同じ流れで、週末にコメントを記入する。
- 「漢字を丁寧に書く。」(図 17)に対し、漢字は国語の教科担当に提出するので、本人が判断できるように教科担当が確認するときに「A・B・C」を付けるように依頼した。

(4) 検証授業Ⅱの成果と課題

	成 果	課 題
視点 1	○ 個人の活動の時間を設定したことで、個別の課題に対する取組ができた。 ○ 個人の活動の時間で活動内容を選択できるようにしたことで、生徒が自分のことについて考える姿が見られた。 ○ 生徒同士で道具の準備等に取り組んだことは、個別の課題に対する手立てにつながった。 ○ 生徒同士で考えを共有する場面を設定したことは、生徒が友達の意見を基に考えをまとめることにつながった。 ○ 教師が生徒の実態に合わせた手立てを行ったことで、生徒が主体的に活動に取り組む姿が見られた。 ○ 終末の場面で、まとめた自分の考えを全体で共有したことで、生活場面に学習したことをつなげていこうと意識付けすることにつながった。	● 個人の活動では、自己選択する内容が、できることに偏っている生徒がいたので、苦手なものも自己選択していくための手立てが必要だった。 ● 個人の活動の内容について、生徒の実態に合っているかを常に確認し、内容を変えていく必要がある。 ● 集団の活動の時間での取組における学習を深めることができるように、個人の活動時間は1単位時間の中でどの程度必要なかは検討すべきだった。 ● 自分の考えをより深めていくためには、自分で考え、友達と考えを共有し、さらに自分の考えをまとめて発表するまでの取組が必要である。 ● 生徒同士で考えを共有する際に、友達の考えを聞くだけになり、聞いて感じたことを伝えることも必要だった。
視点 2	○ 個別面談を実施し、生徒が決めた学校生活で頑張りたいことをより具体的なものにし、振り返る際の判断基準を決めたことで、生徒が自己の振り返りをする際に何をどう振り返ればよいのかを明確にすることができた。 ○ 学校生活で頑張りたいことを具体的にすることで、生徒が反省に書いた内容も具体的な内容になった。 ○ 振り返る際の判断基準を設けたことは、生徒が自己の振り返りをする際に自分のことを客観的に振り返ろうとする姿につながった。 ○ 判断基準の設定等が教師の生徒の何を見取かが明確になったので、コメントの内容がより具体的になった。	● 生徒が考えた学校生活で頑張りたいことと教師の考える生徒の課題とのつながりを検討する必要がある。そのために、個別面談のような取組を定期的に設定する必要がある。 ● 毎日の自己の振り返り（◎、○、△）と反省の内容に矛盾が見られたことから、生徒が反省を記入する際は状況に応じて教師と一緒に振り返りを行う必要がある。 ● 判断基準を設けたことはよいが、その基準が適しているかどうかを教師は見取っていく必要がある。 ● 振り返りシートの活用を通して、担任同士以外の教師との情報共有にどのようなつなげていくかが課題である。

7 生徒の変容と考察

まず、検証授業Ⅰ・Ⅱで発表する場面において次のような生徒の変容が見られた。生徒Bは、人前で話すことを苦手としていることから、検証授業Ⅰでは、自分で考えたことを発表する場面を設定した。そして、教師は生徒Bがうまく発表できれば人前で話すという課題を解決することにつながるのではないかと考え、うまく発表できるように横について言葉掛けをすることを手立てとして講じた（資料1）。しかし、最初はしっかりと発表し始めた生徒Bだったが、次第に声量が小さくなり、最後

資料1 検証授業Ⅰの発表の様子



(T: 教師, B: 生徒B)
 B: 「僕の名前〇〇です。頑張りたいことは、言われた課題をしっかりとやることです。」
 T: 「そして…」
 B: 「作業を丁寧に…」
 T: 「ここまで…」
 B: 「言われた課題をしっかりとできるように…」

には発表内容も聞こえにくくなった。授業終了後に、VTRで授業の様子を振り返ると、教師が言葉掛けをするたびに生徒Bの顔が下を向き、発表することをためらう様子が見られた。この要因として、教師が生徒Bの実態を的確に把握できていなかったため、この活動場面において講じた手立てが生徒Bの実態と合っていなかったと考えられる。

そこで、検証授業Ⅱでは、生徒Bが人前で話すという個別の課題に対し、「検証授業Ⅰでは発表する内容は生徒Bにとってどうだったか。」「発表する内容を確認すれば一人で発表できるのか。」のように生徒の実態や授業の様子から、どのような手立てが必要なのかを検討した。そして、検証授業Ⅱでは、発表の仕方や発表する際の声の大きさについての教材（p. 18, 図12）を使い具体的に確認を行い、発表する内容を一つにするといった手立てを講じた。その結果、生徒Bは教師が横について言葉掛けをしなくても、一人で発表することができた（資料2）。

資料2 検証授業Ⅱの発表の様子



(T: 教師, B: 生徒B)

B: 「自分の役割を果たすためにやることは、自分から仕事を探すことです。」

次に、検証授業Ⅱにおいて個人の活動の時間を設定したことで、次のような生徒の変容が見られた。生徒Bがワークシートに書いた個人の活動内容を選択した理由を見ると、授業の1時間目では、活動内容を選択した理由が「時間内に終わりそうだったから。」という内容だった。それに対して、授業の3時間目では、活動内容を選択した理由が「自分のことについて考えたかったから。」という内容に変わった。また、ほかの生徒も活動を重ねていく中で、活動内容を選択した理由が、「楽しそうだから。」「面白いから。」という内容が「探したり、まとめたりするのが苦手だったから。」「挑戦してみようと思ったから。」という内容に変わった。これは、個人の活動の時間において、活動内容を自分で考えて自己選択するようにしたことで、自分のことについて考えることにつながったと言える。そして、このことは、自分のことについてよく考えることができ、自分のよさだけでなく苦手なことについても考える取組になったのではないかと考えられる。

そして、本研究では、振り返りシートを活用して学校生活における自己の振り返りに取り組み、次のような生徒の変容が見られた。

検証授業Ⅰ後は、学習したことを基に、学校生活で頑張りたいことを決めて学校生活における自己の振り返りに取り組んだ。

【今週の頑張りたいこと】 (◎よくできた ○できた △もう少し)					
	月	火	水	木	金
① 自分を出す	△	△	○	○	△
② あいさつをする	△	△	△	○	△
③ しやべったことのない人としゃべる	△	△	△	△	△
自分の反省	あいさつができてよかったと思います。				

【今週の頑張りたいこと】 (◎よくできた ○できた △もう少し)					
	月	火	水	木	金
① やりとり帳をしっかりと書く	○	○	○	○	○
② 漢字を丁寧に書く	○	○	△	△	○
③ 準備を夜の時にする	○	○	○	○	○
自分の反省	がんばれたからよかった。				

図18 検証授業Ⅰ後の振り返りシート（左：生徒A，右：生徒B）

図18の振り返りシートから、検証授業Ⅰ後の学校生活における自己の振り返りに関して、生徒Aは、学校生活で頑張りたいことの内容が「自分を出す。」のような抽象的な内容であったり、これまでと変わらない自己理解のまま振り返りを行ったりした結果、ほとんど「△もう少し」だけになっている。また、生徒Bも、学校生活で頑張りたいことが「やりとり帳をしっかりと書く。」「漢字を丁寧に書く。」のような抽象的な内容のまま自己の振り返りに取り組んでいる。

そこで、検証授業Ⅱ後は、個別面談を実施し、生徒が考えた学校生活で頑張りたいことを具体的な内容にして、自己の振り返りを行う際の判断基準を設定することとした。

【今週の頑張りたいこと】 (◎よくできた ○できた △もう少し)	月	火	水	木	金
① 授業に参加する (一日◎3回, ○2回, △1回)	△		△		◎
② 朝、一日の流れの確認 (◎家で, ○学校で, △しない)	△		△		◎
③ 友達と話す(一日3回) (一日◎3回, ○2回, △1回)	○		◎		○
自分の反省 最後は◎や○を書けたのでよかったです。					

【今週の頑張りたいこと】 (◎よくできた ○できた △もう少し)	月	火	水	木	金
① 自分から仕事を探す (◎気分よく, ○言われて, △何もしない)	△		◎	◎	◎
② やりと帳をしっかりと書く (◎7日, ○5日, △3日)	◎		◎	◎	◎
③ 漢字をていねいに書く (◎A, ○B, △C)	△		◎	○	◎
自分の反省 やりと帳をしっかりと書けたけど, 自分から仕事を探すが1日忘れていた。					

図 19 検証授業Ⅱ後の振り返りシート(左:生徒A, 右:生徒B)
(黄色の網掛け部分は判断基準)

生徒Aは、学校生活で頑張りたいことに「笑う。」という内容があったので、個別面談を通して「友達と話す。」といったように具体的な内容にし、自己の振り返りを行う際の判断基準を1日「3回なら◎」、「2回なら○」、「1回なら△」と設定した。その結果、「友達に話す」ことを意識することにつながり、自分の反省に「自分から友達に話し掛け、昼休みに遊ぶことができた。」という記述が見られた。また、検証授業Ⅰ後は自己の振り返りが「△もう少し」ばかりだったが、◎や○を記入することができ、自分の反省にも「最後は◎や○を書けたのでよかったです。」と記入している(図19の左の振り返りシート)。また、一度○を書いてから△の評価に書き換えるなど、自分自身を何度も見つめ直しながら、振り返りを行っている様子も見られた。

生徒Bは、検証授業Ⅱ後も、学校生活で頑張りたいことに「やりと帳をしっかりと書く。」、「漢字を丁寧に書く。」といった内容であったが、検証授業Ⅱ後は個別面談を実施し、「しっかりと書く。」は「毎日欠かさずに書くこと。」、「丁寧に書く。」は「国語の先生にAを付けてもらえたら。」と内容についての確認を行い、具体性をもたせた。そして、確認したことを基に、具体的な判断基準を設定した。その結果、振り返りの際に判断基準に照らし合わせて「◎、○、△」の記入をするようになった。また、自分の反省の内容も「何ができて、何ができていなかった。」ということを書き具体的に書くことができていく(図19の右の振り返りシート)。

また、振り返りシートの活用を通して、教師にも次のような変容が見られた(表12)。

表 12 検証授業Ⅰ・Ⅱ後の交流学級担任のコメント

検証授業Ⅰ後	検証授業Ⅱ後
・ 休日が2日あったにも関わらず目標達成していて素晴らしい。更に、高い目標にも挑戦しよう。 ・ 本当に二重丸が増えたね! ・ 先週よりは○が増えましたね。 ・ 目標達成できた日が多かったですね! ・ 次からは頑張ろう!	・ 道徳のグループの話し合いで、Bさんの意見が採用されてグループの意見になったね! 説得力があったのかな。 ・ 先週までの週番の仕事が済んだりして気が抜けていましたね! 油断大敵です! ・ 自ら理科の訂正の忘れを申告できました。声も大きくてよかったです。

検証授業Ⅰの後では、振り返りの項目に関することや反省に対するコメント内容が中心だったが、検証授業Ⅱの後では、交流学級の様子が具体的に書かれるようになった(表12)。これは、振り返りシートの取組を継続して行ったり、検証授業Ⅱ後に生徒が決めた学校生活で頑張りたいことを具体的にしたりしたことで、交流学級担任が生徒の交流学級における様子をより具体的に見取ることができるようになったのではないかと考える。

さらに、検証授業Ⅰ・Ⅱ終了後の実態調査において次のような生徒の変容が見られた。実態調査において、「どのような自分になりたいと思っていますか。」という質問に対して、検証授業前は生徒A、Bともに無回答だった。これに対し、検証授業後は、「いろんな人といっぱい話したい。

(生徒A)」、「自分から話す。(生徒B)」と回答している。これは、検証授業前は、生徒の自己理解が不十分で、なりたい自分について考えることができていなかったからだと考える。

しかし、自立活動の授業や振り返りシートの取組を通して、自分のよさや課題に気付くような活動に取り組んだり、自己を客観的に振り返ることに取り組んだりしたことから、なりたい自分について考えることにつながったのではないかと考える。

IV 研究のまとめ

1 研究の成果

実態調査の結果より、特別支援学級担任は自立活動の授業づくりに悩んでいることが分かった。その背景として、生徒と担任の課題に対する認識のずれが生じていることから、生徒の自己理解が表面的なもので課題を認識するまで至っておらず、自分を客観視できていないことであると考えた。そこで、生徒が自己理解を深め、課題に気付き解決することが必要であり、自立活動を中心とした授業づくりと自己を客観的に振り返る取組を考え検証し、次のようなことが分かった。

まず、集団で取り組む自立活動を中心とした授業づくりにおいて、共通する課題を中心に取り扱うことに加えて、授業の活動場面において、教師が活動内容と生徒の個別の課題を関連付け、どのような手立てが必要なのかを検討し、教具や教材を準備したり、場面設定をしたりすることで、生徒が主体的に活動に取り組むことにつながった。また、個別の課題に対する活動を準備したり、取り組む時間を設定したりすることは、生徒が自分のことについて考えようとしたり、自分のよさやできることだけでなく苦手なことに対しても向き合おうとしたりすることにつながった。これらの取組は、生徒の自己理解を図るために必要であることが分かった。

そして、振り返りシートは、生徒が客観的に学校生活における自己を振り返るのに有効なツールであることが分かった。活用する際は、教師と生徒が個別面談を通して、学校生活で頑張りたいことや自己の振り返りの際の判断基準を具体的なものに設定することで、生徒がより具体的な根拠をもって自己を振り返ることができるようになり、生徒の自己理解を深めることにつながった。さらに、この取組を通して、教師が生徒の具体的な様子を見取ることにも有効であることが分かった。振り返りシートのやり取りを通して、特別支援学級担任が、交流学級における生徒の様子を具体的に知ったり、交流学級担任が生徒の学校生活で頑張りたいことや振り返りの際の判断基準を知ったりすることで、担任同士が生徒の情報を共有し、適切な指導・支援をしていくために活用できることが分かった。

これらのことから、教師が活動内容と生徒の個別の課題との関連付けを行い、必要な手立てを検討し講じることや、個別の課題に対する活動を準備したり、取り組む時間を設定したりする自立活動の授業づくりを行う。そして、生徒が具体的な目標や判断基準を設定した振り返りシートを活用することにより、自分を客観的に見るできるようになり、更には特別支援学級担任と交流学級担任が生徒の情報を共有し、適切な指導・支援を図っていくことが、「自己理解を深め、課題に気付き解決する生徒」の育成につながると考えられる。

2 今後の方向性

(1) 生徒の自己理解を図るための授業づくり

個別の課題に対する取組として設定した個人の活動の時間は、生徒が自分のよさやできること、苦手なことに気付き、苦手なことに取り組むことで課題を解決していく方法を理解することになる。この取組を活用することで、学校生活における課題を解決し、生徒の自信につながり、豊かな学校生活を送ることができるようになる。そのためには、個別の課題に対する取組における有効な手立てを個別の指導計画に反映させ、各教科の指導に生かすことができるようにすれば、教育活動全体を通じた自立活動の指導につながると考える。

(2) 学校生活における自己の振り返りの在り方

具体的な目標設定、判断基準の設定による振り返りをするすることで、生徒は自己を客観視することができ、自己理解を深め、課題に気付き解決することにつながることが分かった。この取組を自立活動以外でも活用することで、より生徒の自己理解が深まるのではないかと考える。また、振り返りシートが特別支援学級担任と交流学級担任の情報を共有するのに有効であることが分かったので、他の教師との情報を共有することにも活用できないか、今後も振り返りシートを継続して活用していくことで明らかにしていきたい。

<引用文献>

- 1) 文部科学省 (2019) 『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編 (幼稚園・小学部・中学部)』(3版) 開隆堂出版株式会社
 - 2) 片岡美華・小島道生編 (2017) 『事例で学ぶ発達障害者のセルフアドボカシー「合理的配慮」の時代をたくましく生きるための理論と実践』 金子書房
 - 3) 小島道生 (2015) 『発達障害・知的障害のある子の豊かな自己理解を育てる支援 実践障害児教育 11月号』 株式会社学研プラス
 - 4) 小島道生・片岡美華 (2020) 『発達障害・知的障害のある児童生徒の豊かな自己理解を育むキャリア教育内面世界を大切にしたい授業プログラム 45』(初版第3刷) ジアース教育新社
 - 5) 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 (2021) 『もしかして、それ…二次的な障害を生んでいるかも…?』 http://www.nise.go.jp/nc/report_material/research_results_publications/leaflet (2021年11月30日閲覧)
 - 6) 文部科学省 (2018) 『特別支援学校学習指導要領解説各教科等編 (小学部・中学部)』 開隆堂出版株式会社
- の特別支援教育 5月号』 株式会社学研プラス
- 小島道生・池田由紀江 (2004) 『知的障害者の自己理解に関する研究—自己叙述に基づく測定の試み—』 特殊教育学研究, 42 (3), 215-224
 - 小島道生 (2010) 『知的障害児の自己概念とその影響要因に関する研究—自己叙述と選択式測定法による検討—』 特殊教育研究, 48 (1), 1-11
 - 滋賀県総合教育センター (2017) 『中学校知的障害特別支援学級における自己理解を育むキャリア教育—「振り返りと目標設定」を「きらりアップタイム」と「キャリアカウンセリング」で深める自立活動の実践—』 https://www.shigaec.ed.jp/www/contents/1517531483350/files/H29_03.pdf (2021年9月4日閲覧)
 - 長崎県自立活動研究会 (2019) 『自立活動学習内容要素表』 長崎県自立活動研究会
 - 古川勝也・一木薫 (2021) 『自立活動の理念と実践 [改訂版]』(初版第2刷) ジアース教育新社
 - 三浦光哉 (2021) 『本人参画型の「自立活動」の個別の指導計画 理解度チェックと指導計画の様式』(初版第2刷) ジアース教育新社
 - 宮口幸治 (2015) 『コグトレみる・きく・想像するための認知機能強化トレーニング』 三和書店
 - 文部科学省 (2018) 『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編 (幼稚園・小学部・中学部)』 https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/fieldfile/2019/02/04/1399950_3.pdf (2021年12月23日閲覧)
 - 文部科学省 (2021) 『障害のある子供の教育支援の手引き～子供たち一人一人の教育的ニーズを踏まえた学びの充実に向けて～』 https://www.mext.go.jp/content/20210629mext_tokubetu01-000016487_01.pdf (2021年10月2日閲覧)

<参考文献>

- NPO フトゥーロ LD 発達相談センターかながわ (2014) 『あたまと心で考えよう SST (ソーシャルスキルトレーニング) ワークシート自己認識・コミュニケーションスキル編』(第10刷) 株式会社かもがわ出版
- NPO フトゥーロ LD 発達相談センターかながわ (2014) 『あたまと心で考えよう SST (ソーシャルスキルトレーニング) ワークシート思春期編』(第4刷) 株式会社かもがわ出版
- NPO フトゥーロ LD 発達相談センターかながわ (2014) 『あたまと心で考えよう SST (ソーシャルスキルトレーニング) ワークシート社会的行動編』(第10刷) 株式会社かもがわ出版
- 岡山県総合教育センター (2019) 『知的障害教育における「主体的・対話的で深い学び」』 https://www.pref.okayama.jp/uploaded/life/716304_6471135_misc.pdf (2021年9月25日閲覧)
- 鹿児島大学教育学部 肥後祥治・雲井未歆・片岡美華 (2021) 『特別支援教育の学習指導案と授業研究 子どもたちが学ぶ楽しさを味わえる授業づくり』(初版第9刷) ジアース教育新社
- 片岡美華 (2021) 『知的障害教育における自己理解・他者理解を育てる授業 実践みんな

長期研修者 [北 山 遥]

担 当 所 員 [山 之 口 和 孝]

【研究の概要】

本研究は、知的障害特別支援学級における自立活動の授業実践を通して、自己理解を深め、課題に気づき解決していく生徒の育成について研究したものである。

具体的には、実態調査の分析を基に、集団で取り組む自立活動において、生徒同士の共通する課題を中心に扱いながら、活動内容と個別の課題との関連付けを行い必要な手立てを講じたり、個別の課題に対する取組を考えたりして授業を実施した。そして、知的障害のある生徒の学習上の特性を踏まえ、具体的な目標や判断基準を設定した振り返りシートを活用した自己の振り返りに取り組んだ。

その結果、生徒が自分のことについて考えたり、自己を客観的に見ようとしたりする姿が見られるようになった。また、担任同士が生徒の情報を共有し、適切な指導・支援をしていくことにもつながった。このことから、本研究における取組が、自己理解を深めることにつながっていくことを明らかにすることができた。

【担当所員の所見】

障害のある者となない者とが可能な限り共に学ぶことができるよう、多様で柔軟な学びの場を整備するとともに、一人一人の教育的ニーズに応える指導・支援の充実が求められている中で、障害のある幼児児童生徒の自立と社会参加に向けた主体的な取組を支援する視点に立ち、障害のある幼児児童生徒が自己理解を深めるための支援をしていくことは重要である。

本研究は、知的障害のある生徒が自己理解を深め、自分の課題に気づき解決することができるようにするために、自立活動の授業における活動設定の工夫や学校生活における自己の振り返りを行う振り返りシートの活用による実践・検証を行ったものである。この研究を通して、個別の課題に取り組む活動と集団の特性を効果的に活用した活動を組み合わせた自立活動の授業づくりが生徒の自己理解を深めることに有効であることが明らかになった。また、振り返りシートの判断基準を生徒と教師が話し合い、具体的に設定することにより生徒が客観的に学校生活を振り返ったり、教師間で生徒の情報を共有し、適切な指導・支援につなげることができたりするようになったことも大きな成果であったと考える。

今後も、自己理解を深め、課題に気づき解決していく生徒の育成するための自立活動を中心とした取組の実践を積み重ね、県内の中学校に対する情報発信にも努めてほしい。